

[514] 日中の漢字共通化はどだい無理な話(三) 文字改革をめぐる(12)

(45) “圓”と“元”どちらが正式?

今、わたくしの手元にある中国旅行で使い残した紙幣と硬貨を見ると、紙幣の方は“壹圓”“拾圓”“貳拾圓”“壹佰圓”などと、“圓”の字を用い、硬貨の方は“1元”と“元”の字を使っている。

“圓”と“元”は語源も異なるし、発音ももとは違ったが、今日では共に同じ *yuán* と発音されることから、両者は通じて使われる。

筆画数の多い“圓”が正字で、“元”はその略字のように受け取られることが多いようだが(かつてわたくしもそう思い込んでいた)、そうとは言い切れないようだ。

中国の法定貨幣は正式には“人民币”と称されるが、《現代汉语词典》の“人民币”の項を見ると“以元为单位”(“元”を単位とする)とある。念のために“元”を引いてみると、“也作圓”(“圓”とも書く)とあり、“圓”の方には“同‘元’”(“元”に同じ)とあって、記述に矛盾はない。

(46) “元”と「円」は同源

今のところ1元は16円だか17円だかで、中国の“元”とわが国の「円」とは値打ちは異なるが、単位としての使い方は、両者は等しい。

ところが、わたくしが「元と円は同じ単位です」と説明すると、「そうかなあ?」と首をかしげる人が多い。「円」は圓の略字であって、発音も「元」とは異なるではないか、と言うのである。

数学なら圓=円、圓=元、よって円=元ということになるのであるが、現実には円と元では発音が異なるので厄介だ。だが、これは中国ではもともと“圓”と“元”では発音が異なった。(ただし意味としては通じるころがあった。)その後、発音の変化があり、“圓”と“元”が同じ *yuán* になってしまった。一方、日本語の方は圓はエン、元はゲンのままで変化はなかったというわけである。

(47) 「遠」→“远”日本語では無理

今日の中国語で、「遠い」という意味の「遠」に簡体字の“远”が使われることは、よく知られているとおりである。言うまでもなく、シンニウ(讎)のなかの“元”が発音を示しているのである。

けれども、厳密に言うと、“元”(yuán)と“远”(yuǎn)では、前者が第2声で後者が第3声と、声調が異なる。

では、“元”の声調に引きずられて、“远”を第2声 *yuán* に発音してしまいはしないか。それはありえない。ことばは文字よりも音が先である。これまで「遠い」ことを第3声 *yuǎn* と言っていた人が、文字に引きずられて *yuán* と発音することなどありえないことである。

ところが、「元」はあくまでもゲンであってエンとはならない日本語にあっては、「遠」の代わりに“远”を使うわけにはいかないことは言うまでもない。

(48) 「歳」→「才」中国語では無理

役所の諸届はもちろん、宿帳(古いかな? 宿泊者カード)にしても、さまざまな申込書にしても、たいていは生年月日のほかに年齢を書かされる。この年齢を書く欄には予め(才)などと「才」の字が印刷されていることが多い。言うまでもなく「歳」の略字である。

中国語では「歳」は簡体字が“岁”で、*sui* と発音される。一方、“才”の方は *cái* と発音する。というわけで、年齢を表すのに“岁”の代わりに“才”と略すことはできないのである。

2017/8/18